

る。これによって、品田が並々ならぬ英語力の持ち主であったと推測される。豊田實『日本英學史の研究』の中に『シェイクスピア物語』の邦訳についても触れた箇所があり、そこで豊田は禿木訳と弥生子訳とを「共にラムの物語の出色の全譯である。」と高く評価しているが、品田の『セキスピヤ物語』こそ出色の名に値する訳書と考えられる。木村毅・齋

藤昌三「西洋文學翻譯年表」によれば、品田は万葉集の研究家であったという。なぜ、万葉集の研究家が『シェイクスピア物語』を訳すに至ったのか、その経緯については詳らかでないが、『セキスピヤ物語』一卷は単に『シェイクスピア物語』の本邦初訳本というだけでなく、その翻訳そのものによっても注目されてしかるべき貴重な書物であると言える。

< 1冊の本 >

## 信 念 を 持 つ

工 学 部 長  
石 川 浩

少年時代は象頭山中腹の図書館によく通った。自宅から歩いて小一時間、観光街の表参道を避けて裏山から入り、木々の緑、大地の草花の季節を追う変化に驚きを覚えながら、大きな楽しみの一つだった。素晴らしい世界の偉人達の伝記物に感銘を受け、貪るように読み耽った記憶がある。中でも、野口英世が大好きだった。極貧の境遇に我が身を重ね、「てんぼう」と嘲笑されながらも不屈の闘魂で医学の道を志し、世界の野口に成長する様に我が将来を得た思いであった。基礎医学を専攻し、難病をもたらす悪の病原菌を必ずやこの世から駆逐してみせん、と息巻いていたように思う。

しかし、こんな思いは大学受験で見事に覆されてしまった。当時は、所得倍増、高度成長への萌芽期で、理工系ブームが社会を席卷していた時代である。今は亡き親父は医学部より工学部へ行けと言う。医学部は6年一貫教育で時間がかかりすぎるというのが、他愛ない彼の主張の根拠であった。浪人も許さんぞと強く申し渡されて、やむなく関西の大学工学部機械工学科へ入学し、大学院修士・博士と一貫して「材料力学」を専攻した。ものを作る設計図を描くためにいろいろの計算をする基礎となる学問である。果たせなかった基礎医学の道を、工学の基礎分野で果たそうという潜在的な願望の結果かも知れない。病を治す医の道に代えて、人工の機械や構造物が故障・破壊しないようにするにはどうすればよいのかに興味をすり替えたと言えなくもない。機械や

構造物の破壊の主要因は「疲労」によるものである。従って、疲労現象を究明し、疲労破壊を防止する設計手法を確立すればよい。

恩師河本実先生の「疲労」の講義に大変に触発され、師事することとなった。先生曰く、一見無味乾燥に見える金属にも人間に近い挙動を示すことが多々ある。例えば、長時間仕事を続けると人が疲れるように、金属も負荷を受け続けると疲労する。トレーニングを重ねれば筋力が付くように、軽い負荷から始めて順々に負荷を増していくと、金属は思いもかけない強さを見せる。蟻の穴のような小さい切欠きでも、応力がそこに集中して大変危険だ、等々…。人間とのアナロジーにおいて、金属に大変親しみを覚えて疲労研究の道に入り、試験機を回してはデータをとり続けた。疲労現象の解明は負荷1千万回が勝負である。毎分2千回転で運転しても、1千万回に到達するまでには3～4日かかる。不眠不休で頑張っても1ヶ月でわずかに7～8個の点がグラフ上に打てるだけの、実に根気のいる研究である。おまけに、疲労強度は人間同様に気まぐれで、全く同一条件で試験してもデータがばらつくことこの上ない。信頼性の高い結論を引き出すには、金と時間が勝負という側面が無視できない。

恩師の御著「金属の疲労」（朝倉書店刊）は、40年以上にわたる先生のこのような疲労研究の成果を総集した労作である。他人の成果の引用は一切ない、と断言されている先生の一徹さは誠に快い。自らあ

るいは弟子達が実際に試験機を回し続けて得たデータを基に、疲労現象を解明し、設計への応用を考究するという一貫した姿勢が貫かれている。信念を持って事を処すことがいかに大切かという大事な警句が潜んでいる。

この頑固さは先生の論文指導にも表れている。実験データに基づいて四苦八苦して論文原稿を作成し、これが完全だと原稿用紙の升目を埋めて、先生に持参すると、完膚無きまでに訂正の朱が入る。書き直しである。ワープロなどのない時代、原稿はすべて手書きであり、必死の思いで再編・持参すると、ま

た朱が入る。再び書き直し、再度持参、またまた書き直し。数回この操作が続く。先生のその時の気分で訂正される部分も皆無ではないが、大部分は、一字も疎かにしないという厳しい先生のご薫陶であった。当時は随分恨めしく思ったこともあるが、振り返ってみると結構自分の勉強になっていることに気付き、今では大変に感謝している。これが本当の修行というものであろう。

若い時代の修業は後の成功への秘訣。若い諸君には、何事にも信念を持って果敢にチャレンジし、素晴らしい人生を勝ち取って欲しいものと願っている。

~~~~~

## 本とエッセイとホームページ

経済学部助手

藤原 敦 志

夜、仕事を終えて家に帰り、夕食をすませると、よく一人で手持ちぶさたになる。そういうときだいたいTVをつけるか、音楽をかける。たまに、まだ思考をまとめる力が残っていれば、読みかけの本を読む。短いエッセイのときもあれば、長編小説のときもある。しばしの間、忘れていた別の世界に自分をトリップさせて、その後、現実の自分と少し距離を置いて向かい合えることで、「心のとげ」みたいなものがとれてほっとする。

フィクションでもノンフィクションでも、分厚い本になると読む前にちょっとした思い入れがある。長編は出だしが退屈なケースが多いから、「実はこの本は、はずれじゃないか？」と途中でよく挫折しそうになる。そんなとき、作者に対して「この人は人を裏切るような人じゃない。おもしろくないのは、僕の読み方が甘いんだ。」という確信が持てれば、何とか峠を越えられるし、後半にしばしば潜んでいる「当たり」の部分を見逃さないですむ。

ときどき新聞や雑誌に、作家が日常的な出来事に関するエッセイを載せている。小説というものが作家が作り出したもう一つの日常の世界だとすれば、そういうエッセイは、その作家自身の自分の小説に対する、コメントというか言い訳みたいなものに当たると思う。僕はまずそういうエッセイを読んで、

「多分おもしろい世界を作ってるんじゃないかなー。」と期待して、その人の小説を手にとってみる。そしてその作品がおもしろいと、またその人のエッセイを読んで、小説の裏に隠されていた別のメッセージを想像してみる。そんな相乗効果がうまく働くと、その作家とある期間ずっと「会話」することになり、僕の日常生活を陰で支えてくれる。

本を出版するという事は、限られた人にしか許されないけど、最近はインターネット上で自分のホームページを開いて、そこに自分の文章を載せることができるようになった。去年、赴任してきたばかりの僕は、大学であまり失うものも無かったので、2週間に一度、自分のエッセイをホームページに載せるという実験を試してみた。高松に来て感じたことや、経済学者としての意気込みなどを、できるだけさっぱりとした文章で書いてみた。日記とは違うから、ふだんぼんやりと考えてることを、きちんと人に伝えられる形にするのに苦労した。あと嘘はつきたくなかったから、エッセイの内容と自分の行動を比較しつつ、どっちかを絶えず修正しないといけないプレッシャーが、ちょっときつかった。でも半年ほどそういうことを続けた後、何となく香川大学になじめたような気分になった。